第2部

地域づくり活動事例集

地域資源の活用

■歴史的建物の保全・活用
■町並み・景観の保全・活用
■地域文化の活用
■地域史等の資源の活用

地域環境の再生

■住環境の整備
■自然環境の保全・再生
■商店街や中心市街地の活性化

地域活力の創出

■地域産業の創出
■交流による地域の活性化
■新たなネットワークづくり
■芸術の振興

地域資源の活用

■歴史的建物の保全・活用

1. 鞆の浦　海の子
2. 軽米らしさ探偵団
3. 赤岡「まちの宝物ホメ残し隊」
4. くらくらアートプロジェクト実行委員会
5. 水口21世紀まちづくり委員会
6. 函館からトラスト事務局
7. 大津の町家を考える会

■町並み・景観の保全・活用

8. 自然と暮らしを考える研究会
9. 引田映像運営協議会
10. 特定非営利活動法人 まちのよそおいネットワーク
11. 神代小路　まちなみ保存会

■地域文化の活用

12. 波宜亭倶楽部
13. 漂探古道
14. 小田原やんべえ倶楽部
15. 「四国へんろ道文化」世界遺産化の会
16. にいがた寺町からの会
17. まちづくりグループ「with AIBE」
18. 阿波農村舞台の会

■地域史等の資源の活用

19. ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村
20. 特定非営利活動法人 さっぽろ村コミュニティ工房
21. 特定非営利活動法人 二十一世紀まちづくりの会
22. 特定非営利活動法人 葉山まちづくり協会

1　鞆の浦　海の子　　広島県福山市鞆地区

外部の視点を入れて、まちの魅力づくりにつなげる

歴史・港町・景観

主婦が中心となって会を結成

万葉集にも詠まれている鞆の浦は、瀬戸内の古い港である。しかも江戸時代建造した港湾施設は、国内の貴重な土木遺産にもなっている。ところが、昭和58年に港を一部埋め立て、道路をつくるという計画が浮上。この計画に対し、多くの住民や識者が反対を表明した。そんな中、子どもたちによい環境を残すことを目的に「鞆の浦　海の子」が平成５年に設立された。活動当初は鞆に残る古い建物の写真や絵画を紹介する「再見展」や昔の衣装をつけた仮装イベントなどを開催し、まちの人たちへ鞆の古き時代をアピールした。そして町並み保存に関わる人たちと知り合ううちに、鞆のことをもっと知るための「鞆学校」を企画、開催することとなった。

学生と共につくる企画満載の鞆学校

平成13年に行われた鞆学校は、６月から10月までに５回開催。町中を歩くウォークラリー、打瀬船乗船体験や浜掃除、港湾の石組みを描くワークショップ、浜の生物調査など、バラエティーに富んだ内容となっている。

６月24日の第１回では「鞆のまちをあるく　クイズｄｅウォークラリー」と題し、まち歩きを行った。一般参加者は37名。鞆のまちの特徴や気になるものなど、参加者が手作りの地図に書き込んでいく。鞆学校には鞆の魅力に引かれた、都市計画やまちづくりを専攻する東京の大学生が参加している。学生は外からの新鮮な視点を持ち込み、まち歩きや情報交換を活発に行った。10月の第５回では、「鞆の「縁の下の力持ち」大工さんに学ぼう」をテーマに、鞆在住の伝統建築を手掛ける棟梁２人を講師に招き、大工技術を間近で体験する縁台づくりと、棟梁が修理や改築を手掛けた建物巡りを行う。そして、こうした活動を紹介する「まちかど博物館」を家主や商店主の協力を得て開催。イベント当日はまちのあちこちで、ふだんにないにぎわいが生まれ、まちに対する関心を高める効果がみられた。

新しい人脈や視点を入れて、まちづくりを進める

常に新しい要素を取り入れ、活動の内容に変化のあるものを心掛けている。さらに直接イベントに参加しなくとも、活動内容やメッセージが伝わるように、毎回冊子やチラシなどの制作にも力を入れている。学生という外部の人たちの協力によって新たな刺激を受けたことから、新しい人脈や視点を大切にする活動となっている。現在、このグループは特定非営利活動法人「鞆まちづくり工房」を設立し、鞆の浦の町並みや港湾施設、伝統的な産業など歴史的遺産を活用したまちづくりを提案し、実践する活動を行っている。

ガリバーマップづくり

★学生と一緒にワークショップ

学生たちとの出会いは、講演を聴くために行った大学で、たまたま先生や学生の前で地域の事情を訴えたことから始まる。直接話したことで、インパクトがあったのか、それ以降協力関係に発展。好評だった第５回の大工さんとのワークショップは、会のメンバーでは考えつかない企画だったので、第三者の視点の重要さに改めて気づかされることになった。

大工さんに学びながら縁台づくり

Q＆A
a29　地域外の学生たちの新鮮な視点を活かす⇒P31

［平成13年度調査］

(特)鞆まちづくり工房
代表：松居秀子
活動開始・設立時期－平成５年
メンバー数－50人
事務局
〒720-0201広島県福山市鞆町鞆850-1
TEL&FAX：084-982-0535
E-mail:npo-tomo@vesta.dti.ne.jp
http://www.vesta.dti.ne.jp/~npo-tomo/

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

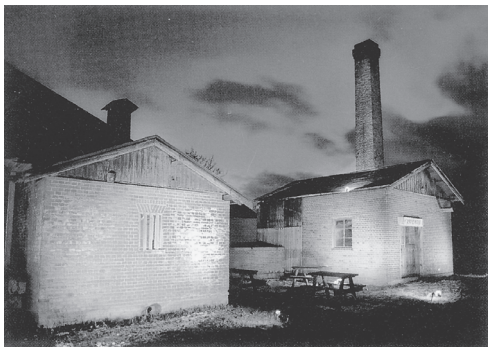
2　軽米らしさ探偵団　　岩手県軽米町

軽米レンガを活かしたまちづくり

建物の保存再生・地場産材

“軽米（かるまい）らしさ”を即答できなかったことが活動開始の契機

豪雨災害の後に開かれた河川工事の会議で、国の専門家からでた「軽米らしさとは？」という問いに誰も即答ができなかったことを機に、軽米らしさを見つけだそうと、この探偵団が設立された。その頃、河川工事にともない、取り壊される建物に地元で製造されたレンガ造りの住宅があり、町には他にも昭和20～30年代に建てられた赤レンガ建造物が20棟ほど残っていた。商工会が、水害後の街づくり調査研究事業で軽米のレンガ建造物を取り上げたこともあり、とりあえずレンガに着目して活動を始めることにした。



軽米産レンガで造られた旧醤油工場を改装した「まちかど煉瓦館」

レンガ造りの工場をリニューアル

初年度は、レンガ造りの旧醤油工場を改装して「軽米まちかど煉瓦館」を開館、20棟ほど残っているレンガ建造物のうち町中心部にあるレンガ建造物５棟のライトアップ実験、探偵団通信の発行、野焼きによるミニレンガ焼成実験等の事業を実施した。

みんなで地域資源活用法を模索する

◆地元学講演会の開催

岩手大学農学部の教授を講師に、県内での地元学の取り組み、地元学を活かした地域づくり、「地域資源カード」を活用した「お宝マップ」づくりについて講演会を開催した。「地域資源カード」とは、町内のレンガ建造物、蔵、井戸などを記録したもので、前年度に行政が主催した講座「軽米探訪ふるさと発見フィールドワーク」で作成していた。

◆「軽米お宝マップ」づくりワークショップ

地元学講演会で得た知識を元にワークショップを開催した。参加者は、３つの地区（グループ）に分かれ、軽米のお宝（地域資源）の写真入り「お宝マップ」を作成した。後日、探偵団のメンバーは、「軽米お宝マップ」を使って、地域資源の活用法を出し合い、「まち歩きモデルコース」案をつくったり、「まちなか活性化プラン」の試案を作成した。

◆軽米レンガ（焼きすぎレンガ）再現実験

河川工事で架け替えられる橋に使うレンガを、昭和20、30年代に製造された軽米レンガ（焼きすぎて色が黒いなど焼き色のムラがある）の風合いに近づける実験を行い、画一的なレンガを個性的なレンガに変えた。

◆探偵団通信の発行（７月～３月）

商工会発行の情報誌の１ページを使わせてもらって、「軽米らしさ探偵団通信」を毎月発信した。イベントのお知らせや報告などを掲載すると共に、軽米らしさ探偵団への理解を深めてもらえるような記事を掲載。

★活動の浸透と共に新たなネットワークが広がる

赤レンガ建物を使って、町内の音楽愛好家を巻き込んでジャズライブを開催した。そこでは、地元出身の著名なキャンドル作家があかりの演出を担当してくれた。また、「まちかど煉瓦館」の周りの花壇にサルビアの苗を提供してくれるという申し出もあった。探偵団の活動が浸透したことで、人のネットワークができた。

［平成14年度調査］

軽米らしさ探偵団
代表：内澤多賀志
活動開始・設立時期－平成13年6月
メンバー数－18人
事務局
〒028-6302　岩手県九戸郡軽米町大字軽米8-99　街の駅内
TEL：0195-48-1362
http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Hanamizuki/5755/

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

3　赤岡「まちの宝物ホメ残し隊」　高知県赤岡町

“絵金”をヒントに地域資源の掘り起こし

伝統文化

ただいま探偵中！

“絵金（えきん）”の伝承をきっかけに地域活性化気運が盛り上がる

“絵金”とは、幕末の絵師・弘瀬金蔵の通称。赤岡には、絵金の描いた芝居屏風絵が多数あり、年１度の「絵金祭り」の際には、商店街の軒先に飾られていた。そんな折、町の衰退に危機感を抱いていた住民の発意で、絵金芝居絵に描かれている歌舞伎の場面を自分たちで演じようと「土佐絵歌舞伎伝承会」が誕生。２年後、この活動に触発され、商店街の女性が商品開発グループ「やつゆ会・金木犀」を結成。横町３地区商店街では個性的なフリーマーケット「冬の夏祭り」を開催していた。商店街に少しずつ活性化の気運が盛り上がってきた頃、町がＨＯＰＥ計画策定に着手し、これらのグループと行政・商工会・住民等が専門家を交えて「まちづくりワークショップ」を始めた。この時、「赤岡探偵団」として「昔からある古い良い雰囲気の建物や路地」の魅力を再認識した有志が、赤岡の宝物を残し、活用することを考えるグループとしてこの隊を結成した。

ユニークな参加・体験型のイベントが盛りだくさん

赤岡に今あるものに目を向け、価値を再認識し残すことを目指している。活動を開始して、今まで見落としていた古い建物などたくさんの宝物を発見することができた。ただし、宝物の所有者に「残してほしい」と言うだけでは説得力がないので、魅力的な使い方を示し賛同を得ることとしている。

◆旭湯お喜楽演芸場の開催

取り壊されようとしていた大正期の銭湯「旭湯」を借り受けて隊の活動拠点としながら、カリンバ演奏会、影絵芝居、幻灯会など、番台や湯船を利用できる催しを開いて魅力的な活用提案を行った。

◆親子赤岡探偵団の開催

夏休みに開催したイベントで、「赤岡の不思議」を撮った写真の場所を親子のチームが探し出し、ポラロイドで撮影するというもの。また、その写真にコメントを書いてもらって「あかおカルタ」をつくった。

◆他地域との交流、赤岡のＰＲ

若手の工芸作家の制作・発表の場に町内の空家を活用してもらうために、まずは「冬の夏祭り」のイベント時に、県内外から参加した作家に作品の制作や販売をしてもらった。また、「絵金祭り」に来町した「岡山県真備まちづくり協議会」30名と、町の散策、旭湯での交流会、歌舞伎の視察を共にしたり、立命館大学のゼミ一行21名と、「親子赤岡探偵団」の要領で、町歩き、カルタづくりを行った。さらに、「地域づくり団体全国協議会研究」に隊員が参加し、赤岡の取り組みを広くＰＲした。

ＨＯＰＥ計画とは…

ＨＯＰＥ計画とは、「地域住宅計画」を意訳した「Housing with Proper Environment」(地域固有の環境を活かした住まいづくり)の略称で、日本全国画一的な計画でなく、地域性を活かした住宅・まちづくりを進めるため、地域の事情に精通した市町村が策定する計画。昭和58年に建設省（当時）が施策として打ち出し各地で策定が始まったが、平成６年度からは、地方公共団体が策定する「住宅マスタープラン」の中に整理・統合された。

Ｑ＆Ａ
a32　よそ者である“風の人”の視点を活用 ⇒P32

［平成12年度調査］

赤岡「まちの宝物ホメ残し隊」
代表：間城紋江
活動開始・設立時期－平成12年
メンバー数－10人
事務局
〒781-5310　高知県香美郡赤岡町横町497
TEL&FAX：0887-54-2666

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

4　くらくらアートプロジェクト実行委員会　石川県金沢市大野町

眠っていた蔵空間を、手づくりで再生活用

アート・空き蔵・ワークショップ

空き蔵があちこちに残っていたまち

大野町は石川県金沢市の北西にあり、江戸時代は北前船の寄港地として大いに賑わっていた。物資流通の要にあった往時は、豊富な原材料を背景に一大醤油醸造地としても知られていた。平成７年頃には、醤油醸造のために建てられた蔵が約40棟残っていたが、現在は廃業してその多くが空き蔵となっている。沈滞気味の町をなんとかしようと、地元の商工振興会が地域プランナーの水野雅男氏に声をかけた。そこで水野氏は、この蔵が町再生の手がかりになると考え、「くらくらアートプロジェクト実行委員会」を結成。蔵再生プロジェクトの事業を立ち上げたのだ。第１号は委員会のメンバーが持っていた蔵を改修。有志が資金を出し合い、自らの手で改装して喫茶サロン「もろみ蔵」をつくる。最初は「メンバーで一杯やれる場所に」という軽い動機であったのだが、これが思わぬ方向へ展開していった。

ワークショップでできあがる、新鮮な蔵空間

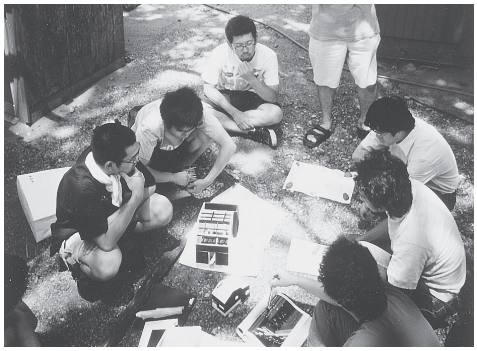
喫茶サロンとして再生した蔵は、独特の雰囲気をもつ空間となり、まず建築関係者の関心を引いた。そして、地域の人が出資した活動が話題となり、マスコミが注目する。さらにボランティアで改修作業に参加した人が、この建物への並々ならぬ愛着をもったのだ。この第１号がきっかけとなって、「ｏｘｙｄｏｌ」(平成11年11月～12年10月)、「ハマヨスタジオ」(平成12年10月～13年３月)、「ハマヨパティオ」(平成13年５月～６月)、「海辺のアトリエ」(平成13年７月～14年)を改修。これら蔵再生はすべてワークショップの手法がとられた。

特に２例目の「ｏｘｙｄｏｌ」は、アートの制作・展示の場として、地元の芸術系大学学生などの若手アーティストに提供。これがアート活動の拠点となり、新たなコミュニティづくりに貢献する。以降、町づくりにアートが欠かせなくなり、ユニークなまちづくりに発展した。

会員一人ひとりが、興味あるテーマに参加

会の活動はこうしたワークショップの他に、年３回のアートフェスティバルがある。季節ごとに、フリーマーケットやアートフィルム上映、演劇上演、路上パフォーマンスなどを行っている。町の活性化から始めた活動は、再生した蔵空間から飛び出し、地区全体を巻き込んだムーブメントとなった。

会員は個人として基本的に興味のあること、やりたいことについて、自由に横断的に参加・活動をしている。一つひとつの作業やイベントを楽しみ、自分たちのペースを進めながら、活動を持続させている。



蔵のワークショップ風景

★空間からアートへ、アートから祭りへ

難しい顔してまちづくりを考えるのではなく、気楽に住民たちが集まれる場づくりから始めた蔵改修。できあがったら、空間のよさ、おもしろさを知ってもらおうと、コンサートや展覧会を開催。こうして集ったアーティストたちは、まちを舞台に演劇やインスタレーションなどの活動を展開した。住民が参加するワークショップやアートフェスティバルは、まちに欠かせない一大イベントに成長している。

Q&A
a2 アーティストや建築家の卵に創作の場を提供⇒P14
a14 気楽に立ち寄れる喫茶サロンを開設⇒P22
a48 メールマガジンと掲示板でファンを獲得⇒P42
a51 まちの将来像をシナリオとしてまとめる⇒P45
a53 活動の区切りごとに懇談の場で振り返る⇒P46

[平成13年度調査]

くらくらアートプロジェクト実行委員会
代表：水野雅男
活動開始・設立時期－平成９年
メンバー数－39人
事務局
〒921-8025
石川県金沢市増泉2-21-25-1007
TEL:076-247-5767　FAX:076-247-5766
E-mail：mmasao@mb.infoweb.ne.jp

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

5　水口（みなくち）２１世紀まちづくり委員会　滋賀県水口町

地域の文化財活用を考える住民グループづくり

文化財・活動支援

総合計画づくりの参加メンバーが地域活動支援を目指す

この委員会は、水口町が、町の新しい総合計画を住民とのパートナーシップでつくろうと呼びかけ、公募により集まった町民によって結成された。総合計画は平成13年2月に策定されたが、そのメンバーが、「生みの親から育ての親へ」ということで、地域住民のまちづくりを支援するインターミディアリー（中間支援組織）としてのＮＰＯを目指そうと考え、活動を開始した。

旧水口図書館の有効活用を考える住民グループづくり

アメリカ出身の建築家ウイリアム・Ｍ・ヴォーリズ設計による旧水口図書館は国の登録文化財であるが、現在は使用されておらず老朽化が進んでいる。委員会では、地域住民のまちづくり活動のテーマとして、この建物の有効活用をとりあげ、新しい住民グループの立ち上げに取り組んだ。

◆フォーラムの開催

児童文学者として地域に関係の深い巌谷小波（いわや さざなみ）をテーマとして、フォーラムを２回開催した。フォーラムの準備の過程で、教育委員会や小学校、地域の他のＮＰＯとの協力関係・ネットワークができた。また、フォーラムには地域の文化に関心の高い人たちが参加し、潜在的なキーパーソンの掘り起こしができた。

◆「旧図書館の活用を考える会」の立ち上げ準備

町の広報を通じて、「旧図書館の活用を考える会」の参加者を募集した。新たな参加者19名の応募があり、助成期間後の平成15年4月には「旧図書館の活用を考える会」が結成された。

地域に縁の「巌谷小波」をテーマに人材発掘

住民主体の活動グループを立ち上げるきっかけとしてフォーラムを開催したが、そのテーマは地元に関係の深い「こがね丸」などを創作した児童文学者・巌谷小波とした。建築家ヴォーリズは意外と知られていないし、建築では興味をもつ人も限られる。巌谷小波の作品は多くの人が知っており、地域の多くの人たちに関心をもってもらえるテーマだ。

フォーラムでは、実際に地域文化に関心の高い人たちが集まり、また参加者の多くは「旧図書館の活用を考える会」への参加を前向きに考えており、ねらい通りの参加者に来てもらうことができたといえる。

ヴォーリズ設計の旧水口図書館

第２回フォーラムで演奏する
さざなみ記念アンサンブル

★小学校でのフォーラム開催が予期せぬ効果を生んだ

第１回フォーラムは旧図書館で、第２回フォーラムは小学校で開催した。第２回の会場となった小学校では、先生たちが総合学習の中でこのフォーラムの話題を取り上げ、「巌谷小波」を子どもたちに紹介した。これは予期しなかったうれしい効果であり、地域に根付く着実な一歩を踏み出せたと考えている。

Q&A
a42　地域の求心力となる“核”を見つける⇒P39

［平成14年度調査］

水口21世紀まちづくり委員会
代表：木田勝彦
活動開始・設立時期－平成11年7月
メンバー数－18人
事務局
〒528-0034　滋賀県水口町水口5676
TEL&FAX：0748-63-7310
E-mail:itomarunomama@nyc.odn.ne.jp
http://www.ex.biwa.ne.jp/~mina21mach/

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

6　函館からトラスト事務局　　北海道函館市西部地区

空き家を活用した地域の再生の取り組み

空き家・アーティスト・公益信託

市民が委託者となった初めてのまちづくり公益信託

函館の元町には、外壁の下見板に色とりどりのペンキが塗られた、明治から昭和初期にかけての歴史的建物が数多くある。その個性的な色彩に注目した街並みの研究に、トヨタ財団から研究奨励金が出された。それを元に、市民が市民を応援するまちづくり公益信託「函館からトラスト」が平成５年に誕生。トラストは、その後10年間に25件の市民団体に助成をしてきた。しかし、この元町を含む西部地区は空き家が増え、その空洞化が深刻になり、このトラスト事務局自身が、直接この地域の環境と暮らしの向上を目指す活動に取り組むことになった。

空き家活用ワークショップの様子

増えた空き家を活用して衰退した街を救いたい

◆アーティストが住み込んで、家一軒を丸ごと展覧会場に

空き町家にアーティストが一定期間住み込み、地域住民との芸術文化の交流活動を行った。

札幌、東京、函館で活動する美術系のアーティストが、トラストの助成で行ったペンキ塗りボランティア活動で塗り替えられた町家に住み込み、家屋内全体を展覧会場に見立て、作品を展示した。住宅街の中での活動であるため、地域住民に積極的に開放し、住民との交流を図った。

◆空き家活用ワークショップでアイデア続出

地域内の空き町家、空き建物に注目し、その活用を考えるワークショップを開催した。かつて函館の中心地であった元町には、町家の他に、今は使われていない元分庁舎や元警察署などの歴史的建造物がある。それらの内部の見学会を開催したり、街歩きを実施して、街の問題点、空地、建物の状態などを点検した。そして、その結果を元に、活用を考えるワークショップを実施した。ワークショップは空き町家で行われ、かつての分庁舎を「映画のロケセンター」に、元警察署を「バックパッカー用の宿泊所」に、などの多くのアイデアが出された。

◆空き家で交流サロンの開催

映画監督の大木裕之氏や青森国際芸術センターの浜田剛爾氏などを講師に呼び、交流会を開催した。

公益信託事業からの新たな展開

過去10年間、公益信託事業の事務局を担ってきたが、これからは事務局業務にとどまらず、自らが衰退著しい西部地区の空き家、空き地の問題に取り組むことにした。もともと事務局のメンバーの多くは、元町市民活動に携わっており、元町の現状に対する危機感は人一倍強いといえる。

★アーティストの力で町家をアピール

空き町家での展示は、アーティスト自身が１ヶ月間住み込んで行った。住民の日常生活の中に、アーティストとその作品が入り込んでいる状態をつくったのだ。町家は常に地域に開放し、短期間の展示では体験できない住民との交流が生まれた。それは空き町家の存在の大きなアピールになると共に、町家活用の新たな提案となった。

［平成15年度調査］

函館からトラスト事務局
代表：河内昌子
活動開始・設立時期－平成５年７月
メンバー数－19人
事務局
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15
TEL&FAX：0138-26-6020
http://www008.upp.so-net.ne.jp/jirojiro/kara.htm

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

7　大津の町家を考える会　　滋賀県大津市中心市街地

町家とまちなかが大好きな人たちの集まり

町家・連続講座・マップとプレートづくり

多彩な人材が集まって会を設立

大津市の中心市街地は、商店街の衰退と人口の減少、高齢化などによって活力が失われ、町家が空き家となったり取り壊しが増え、加えて新しい建物の建設などによって町並みの変貌が進んでいる。

こうした状況に対して、町家や町並みのすばらしさを再発見し、その保存・再生、まちの活性化に取り組むことを目的に会を設立。会員は、会社員や公務員、主婦、学生の他、大学教員、都市プランナーや大工職人など、多彩な人たちが集まっている。

「町家・まちなか・萬（よろず）塾」

町家とまちなかの面白さを知ってもらうための活動

◆**「大津百町館」の運営**

平成13年から、空き家となっていた町家を借り受け、「まちづくり大津百町館」として再生。町家体験の場として一般に開放すると共に、イベント会場などとしても活用している。

◆**「大津百町おもしろ発見連続講座」の開催**

平成15年度は、大津百町の歴史や文化に焦点を当て、大津絵師や芸妓など多彩な講師を招き、全7回の連続講座「町家・まちなか・萬（よろず）塾」を開催した。

◆**「大津百町おもしろ発見探偵団」の開催**

一般市民を対象に、まちや商店街の楽しさを知ってもらうためのタウン・ウォッチングとワークショップを開催。

◆**「大津百町おもしろ発見マップ」と「大津百町おもしろ看板」の作成**

市民や観光客に活用してもらうために、歴史的・文化的な資源をまとめたマップを作成したり、こだわりのある店舗などに掲げてもらうための拍子木型看板を作成した。看板づくりは、平成15年度をスタートとして、毎年少しずつ増やしていく予定だ。

町家のすばらしさを実感できる活動拠点

「まちづくり大津百町館」は、運営委員のボランティアによって管理・運営されており、週1回の休館日を除いてほぼ毎日開館している。敷地およそ100坪で通り庭に吹き抜け、広間に中庭を備えた築100年を超える本格的な町家である。イベントや会合のない日も、誰でもふらっと立ち寄り、町家のすばらしさを直に実感することができ、より多くの市民にその保存・再生の重要性を理解してもらうことができる。

★身近なテーマで連続講座

大津の町家を考える会の活動は、より多くの人々に町家の保存・再生やまちなかの活性化の重要性を理解してもらう「運動型」の活動である。こうした活動ではイベントが有効。特に身近なテーマを設定し、短期間に行う連続講座は、人々の関心を引きやすく、集客力もある。

Q&A
a15 地元でのお付き合いを大切に拠点を運営⇒P23

[平成15年度調査]

大津の町家を考える会
代表：青山菖子
活動開始・設立時期－平成９年
メンバー数－85人
事務局
〒520-0043　滋賀県大津市中央1-8-13
まちづくり大津百町館
TEL&FAX：077-527-3636
http://hyakucyou.s11.xrea.com/

■□地域資源の活用■歴史的建物の保全・活用

8　自然と暮らしを考える研究会　佐賀県相知町

水車の復元、身近な環境を手づくりで改善

身近な環境・水車・自然

自分たちに何ができるかを問いかけて活動開始

「ふるさと再発見ミニ文化講演会＝先人たちが残した歴史に学ぶ我がふるさと」と題した講演会が、平成８年、地元の寺の住職、郷土史家の先生や古老の方を講師に迎えて行われた。この会に刺激を受けた仲間が集まって設立したのが、この「自然と暮らしを考える研究会」だ。

まずは、姿を消していく「水車」に着目

町では、「町切水車」という２・３基の水車が今も稲作に活躍していたことから、水車の持主の方の指導で水車の取り付けを体験をした。その後、文献や資料を収集したり、相知町「基金」を申請して毎年１基ずつ「町切水車」を復元させ、田植えの前の日曜日に「町切水車取付け研修・交流会」と銘打って、地域住民と一緒に取り付けを行う。現在、６基の水車が稼動している。用水路周辺には彼岸花の球根の植えた他、平成10年頃からは大川（厳木川）と町切堰周辺の草刈（年に３回くらい）などの美化活動も行っている。

自分たちの力でできる情報発信

洪水などで破壊された「堰」の改修記念碑から水車が回っている一定の区間を「（仮称）ふるさと水車文化むら構想」として町へ提言したが、財政難の折、実現の見通しは厳しかった。そこで、地区の人たちの理解と協力を得ながら県内の銀行やＮＨＫのロビーなどで写真展などの開催をしたり、教育機関の体験学習、医療機関の癒し保養、文化団体の歌会研修、ウォーキング参加者との交流など、さまざまな企画を実施している。

水車のかかる町切堰を歩行者が安心して歩けるように

◆危険箇所の改善と看板づくり

水車のかかる用水路の上流（町切堰）までを安心して歩けるように、行政の理解を得て通路をつくった。鋼鉄製の本体の加工は業者に依頼し、会員がサビ止め塗装を行った。取り付けは、会員と地区住民の協働作業。また、用水路付近の駐車場にあった「手づくり手書き看板と掲示板」が老朽化していたので作り直した。

◆他団体との交流促進とHPの開設

「全国川のワークショップ」など、県内外のワークショップや交流会に積極的に参加し、交流の輪を広げた。また、会員２名が「ホームページの作成講座」を受講し、会のホームページを開設した。

活動を支えるメンバーと地域の有志

★保存・復元・継承と、模索しながら発展

小さなまちの小さな水車だと思っていたが、調べてみたら、その起源はエジプト文明につながっていると分かり、大きな遺産として継承したいという想いを強くした。そこで、残っている水車を保存するだけでなく、「もっと復元させよう」と、山林の間伐材などを使って水車を手づくりした。

用水路にかかる　「町切水車」

Q＆A
a35 地道に活動を継続し行政からの信頼を得る⇒P34

［平成14年度調査］

自然と暮らしを考える研究会
代表：石盛信行
活動開始・設立時期－平成８年７月
メンバー数－会員10人
事務局
〒849-3216 佐賀県東松浦郡相知町町切199-1番地
TEL：0955-63-2177
E-mail：suisha@ceres.ocn.ne.jp
http://www11.ocn.ne.jp/~suisha/

■□地域資源の活用■町並み・景観の保全活用

9　引田（ひけた）映像運営協議会　香川県東かがわ市引田松の下地区

映像を活用して古い町並みを蘇らせる

町並み保存と活用・映像フィルム

古い町並みと映像を組み合わせよう！

江戸から明治にかけて形成された古い町並みが残る香川県引田地区。引田御三家の中の一軒の旧家が、空き家となり荒れ果てていた。住民の請願により、町がこの旧家購入を決定、現在も補修作業が続く。

町並み保存の気運が高まった平成14年、熱意ある住民により「引田町並み保存会」が結成された。団体の代表者が旧家を活用するソフトを探していた際、友人から、岩波映像株式会社がドキュメンタリーフィルムを寄贈してくれるという情報を得た。さっそく町に働きかけ、同社から町へフィルムの寄贈を受けた。そこで、町並み保存会とほぼ同じメンバーで「引田映像運営協議会」を結成。映像と引田の文化を組み合わせた地区再生の取り組みを行うことを活動の目的としている。

活動拠点としている旧家

地域の文化を掘り起こす

◆フィルム上映会の開催

寄贈されたフィルムの上映会を、改修の作業にあわせて蔵や市役所の視聴覚室で開催したほか、自治会館への出張上映も行っている。また、映像を活用したまちづくりを検討する勉強会を通して、メンバー間で情報の共有を図った。

◆ビデオコンクール開催と祭りの活用

団体の独自の試みとして、秋祭りをテーマとしたビデオコンクールを行い、ビデオ作品を住民から広く募集した。また、地域に根付いた秋祭り、ひな祭りなどの祭りを地域文化の核ととらえ、地元の食文化にも着目した。この地域では、ひな祭りに民家の道路から見える部屋に雛人形を飾り、見学に来た子どもにお菓子を振舞うといった独特の風習があったが、いつしか廃れてしまっていた。会では、古い町並み沿いにこの祭りを復活させて、伝統料理を詰めた弁当を近隣の飲食店に委託し販売するなど、住民参加のイベントとして仕立て直した。

力強いサポーターと自らのネットワークの駆使

旧家の補修が本格化し使用が難しくなたことから、会では古い町並みに残る旧郵便局を安価で借り受け、新たな活動拠点とした。フィルム上映や展示などに活用する他、住民の溜まり場になるようにと日祭日には喫茶店を開いている。

岩波映像株式会社との連携は、映像の技術的な指導にとどまらず、他の地域のまちづくり情報も得るなど継続している。財政的に支援してくれる行政との連携も固い。メンバー各人が、医師、教職員、町役場職員、議員など地域の要職に就いていたこともあり、各人のネットワークを有効利用して活動の実践をスムーズにし、メンバーの獲得にも努めている。

★高い評価が活動エネルギーを生む

引田町など3町は平成15年に合併したばかりで、当の引田地区は文化、観光ゾーンに位置づけられている。市の企画と団体の意図との一致点が多い。団体の活動は行政・住民から高く評価されていて、自分たちの活動がなくては地域のまちづくりはできないというメンバーの自負につながり、活動推進の力となっている（フィルムコミッション設立構想等）。第三者から高く評価されることで、メンバー内にエネルギーが蓄えられる。

［平成15年度調査］

引田映像運営協議会
代表：山田和弘
活動開始・設立時期－平成14年8月
メンバー数－27人
事務局
〒769-2901　香川県東かがわ市引田3480
TEL：0879-33-5608　FAX：0879-33-7159

■□地域資源の活用■町並み・景観の保全活用

10　特定非営利活動法人　まちのよそおいネットワーク　山口県山口市

景観賞から活動の幅を広げようとＮＰＯに

景観・まちづくり・総合教育

景観を通して自分たちの生活するまちを眺めてみよう！

建築の専門家などが集まって、「景観」をキーワードにまちづくりを考えようと発足。市民に、市内の心地よいと感じる建物の写真を撮って応募してもらい、それを審査して表彰する「景観賞」を中心に活動してきたが、平成12年3月のＮＰＯ法人取得を機に、活動の幅を広げようとしている。

現場の声と専門家の知恵のネットワーク化に取り組む

ＮＰＯ法人として本格的な活動を開始する年となった平成12年度は、20世紀を締めくくる「手作り景観賞」の実施の他、総合的学習研究会に力を注いだ。しかし、教育現場にいる教師陣の参加は少なく、総合学習に関わろうとした試みは思うように進まなかった。

◆研究会の設置

すでに取り組んでいた「住まい副読本研究会」を「総合的学習研究会」に改め、住まい・まちづくりに関する学習や環境教育に加えて、国際理解、福祉教育、情報教育等の分野も含め、総合学習用の教材などを検討。

◆小中学校へのアンケートを実施

平成14年度から本格的に始まる「総合的な学習の時間」が学校現場でスムーズに導入される方策を検討するために、小中学校にアンケートを実施。

◆県内で活動するグループへのアンケートを実施

「総合的な学習の時間」をサポートする団体のネットワーク化を図るために調査し、あわせて、サポートの意向のある団体のデータファイルを作成。

◆総合的学習セミナーの開催

先生に幅広い情報を得てもらうことと、参加者相互のネットワーク形成をねらいに、環境・住まい・国際理解・福祉・情報５つの分野から６人の専門家によるセミナーを開催。セミナーの記録は、一連の取り組みとあわせ報告書にまとめ、印刷・製本した。

住環境のコーディネーター役を目指して

ＮＰＯ法人化を機に活動範囲を拡大し、「様々な分野での市民主体の住まい・まちづくり活動への支援」、「住まい手と作り手の仲介役」を目指し、①住教育・環境学習ネットワーク化のための活動、②高齢者の住宅改修支援のための活動、③公共建築物づくりに利用者の声を反映させるための活動への参加、④県内各地での住まい・まちづくり活動への支援（人材派遣や情報提供）などに取り組もうとしている。

教育現場へのアプローチに知恵を絞る

★これからも教育現場に働きかけ続ける

「総合的な学習の時間」に関わろうというのは難しい取り組みで、県教育庁の担当に接触したが具体的な効果をあげることができず、研究会等も参加者が少ないという残念な結果になってしまった。しかし、「長期的展望に立って全学年を通した系統的な学習を行う必要がある」など、現場の留意事項を知ることができた。なにより、この取り組みに積極的に関わってもらえる人材や団体を発掘できたことが大きな成果だ。

［平成12年度調査］

（特）まちのよそおいネットワーク
代表：福田東亜
活動開始・設立時期－平成４年３月
メンバー数－正会員28名、サポート会員22名+2社
事務局
〒753-0851山口県山口市大字黒川1277-8
東孝次
TEL&FAX：083-928-4598
E-mail：iwata218@mocha.ocn.ne.jp
http://www.sujet.co.jp/matiyoso/

■□地域資源の活用■町並み・景観の保全活用

11　神代小路（こうじろくうじ）　まちなみ保存会　　長崎県国見町神代小路地区

リタイアメントによる「まちのこし」運動

伝建群・Uターン・ふるさとカレンダー

町の荒廃に危機感を持ち会を結成

平成11年、神代小路地区の区役員（自治会役員）７名によって、このままではまちが荒廃してしまうとの危機感から活動が始まった。思い立った頃、地元新聞社の「次代に残そう長崎百景」キャンペーンに住民の協力を得て応募し入賞したことが契機となり、本格的な活動を開始。「応募運動を繰り広げる中、地域住民との対話が進み住民に対する動機づけになった。なにより、みんなが予想以上に参加してくれたことが活動のはずみになった」と、当時を振り返りメンバーは語る。

武家屋敷の町並みが残る神代小路地区

“還れ　故郷へ”コール事業―U・Ｉターン促進運動

◆郷土出身者と縁故者の情報整備

地区住民に聞き取り調査を行い、出郷者の消息を整理。

◆ふるさと心を呼び起こすグッズの作成

消息の明らかになった出郷者に「ふるさとカレンダー」など、ふるさとの情報を発信。

◆「帰ってこらした会」の開催

帰省時期に、神代の方言のみの懇親会を開催。生活文化の復活をねらう。

「郷土出身者の情報整備」では、地区内60世帯のほぼ全世帯に調査を実施した。この聞き取り調査では、それぞれの親族の微妙なプライバシーの面から、理解協力を得るために予想以上の労力を費やした。しかし最終的に約140人の消息を確認することができた。観光による交流人口を増やすのではなく、定住者を増やすことを目標として事業を進めている。

町並み保全を推進

会では、景観上違和感があった地区内工場跡地について町買い上げ請願の署名運動を行ったことで、公共地としての買い上げが実現。また、武家屋敷が集中するメインの通りの電柱を裏側の私有地に移設させるなど、町並みに関わる事業を精力的に実行している。町が実施する「伝統的建造物群保存対策調査」では調査を全面的にバックアップし、行政・専門家と連携しながら町並み保全を推進している。

Uターンを促進する

Uターンを促進するため、出郷者とその家族が当該地区を訪れるような仕掛けづくりを考えている。Uターン者のきっかけは、子どもの頃にこの地区で遊んだ記憶が大きいという。同じように、「孫が喜ぶのであれば、リタイア後は神代に帰ろう」と、孫世代に原体験を提供できる環境を整えたいとしている。調査を実施して、「借り手があれば貸してもいい」など、これまで不在家主だった人のうれしい反応も見られた。

★町の調査に協力して住民の意向を把握

町の調査に協力をすることで、「観光地化は望まない」という地区住民の意向を確認することができた。町並みの保存を行っていく上で貴重な情報だった。これからこの意向をふまえ、「重要伝統的建造物群保存地区制度」の助けを借りて、住民の自発的な“やる気”を起こしていく。

★電柱の移設

①地元電力会社に神代小路地区を応援してくれるサポーターがいた。②電柱移設のために私有地を提供してくれる住民の理解があった。③街路灯設置について町の協力が得られた。この３つの事柄が重なり実現可能となった。

［平成15年度調査］

神代小路 まちなみ保存会
代表：谷守隆
活動開始・設立時期－平成12年２月
メンバー数－59人
事務局
〒859-1303　長崎県南高来郡国見町神代丙130番地　帆足治行
TEL&FAX：0957-78-1652

■□地域資源の活用■町並み・景観の保全活用

12 波宜亭倶楽部　群馬県前橋市

銘菓「萩の餅」復活は、市民に大好評

郷土食・建物・文学者

興味をもった３つのグループが集まって発足

近代文学をリードし、口語自由詩を完成させた萩原朔太郎は前橋市出身の詩人である。この朔太郎が愛したという市内の茶屋「波宜亭」は当時の文化サロンとして知られ、ここで出される「萩の餅」は前橋銘菓に数えられていた。しかし、約80年前に店がなくなってしまうと、その記憶も人々から消えていった。

再び日の目をみたのは、地元の郷土文化雑誌の記者が朔太郎ゆかりのものを取材する過程で、偶然「波宜亭」の建物の図面と「萩の餅」のレシピを発掘したことに始まる。「前橋中心街の活性化を考える会(以下考える会)」は、この記事を書いた記者を招き講演を行った。そしてまちづくりに取り組む「考える会」と記者グループ、それに記事に関心をよせた「前橋文学館友の会」のメンバーが合流して、「波宜亭」復元と「萩の餅」復活を目的とした「波宜亭倶楽部」が発足した。

幻の銘菓「萩の餅」の実作と販売

倶楽部発足から２ヶ月後、県民広場で行われた上州の夏祭りで、さっそくレシピ通りに「萩の餅」を手づくりして販売。あっという間に売り切れとなる好評ぶりであった。翌年の朔太郎60回忌のイベントでは、地元菓子組合の協力を得て「萩の餅」をつくり、2500個を15分で完売。その後、秋には「食の文化祭」で、翌々年春には倶楽部が主催した「波宜亭と前橋(まち)」というシンポジウムで、再度手づくりの「萩の餅」を用意して参加者に販売した。

朔太郎に関連した多彩な活動

もちろん倶楽部では「萩の餅」ばかりをつくっているのではない。萩原朔太郎の郷土望景詩をテーマに連続講座を１～２ヶ月に１回程度開催。新たな朔太郎研究として、成果を本にまとめていきたいと考える。さらにタウンウォッチングを主催し、まち歩き、まち巡りの新しいコースの開拓に取り組んだ。機関誌「はぎてい」は年４回発行。絵本作家による小説風紀行文など読み物中心に誌面をつくり、あわせて前橋の魅力発掘や会の活動を定期的に報告している。また、倶楽部設立の主旨に賛同した事業者が商品開発を手掛けて「はぎはぎブランド」をつくり、「はぎはぎクッキー」や「はぎはぎビール」という地元のオリジナル商品を登場させている。

「波宜亭」再建は少し先になる見込みだが、イベントを仕掛けたり、積極的に参加することで、会の活動趣旨を広く理解してもらおうと考えている。そして、共に行動していく人の輪を広げていっている。

「萩の餅」の講習会風景

★銘菓の復活

いつの世もおいしい食べ物には、人々の関心がよせられる。古い資料に偶然残っていた和菓子復活が話題となり、「萩の餅」はどこのイベント会場でも売り切れるほどの好評ぶり。地元にゆかりがあって、懐かしく、しかも手軽な菓子という素材が、たくさんの市民に関心を持ってもらうきっかけとなっている。

「波宜亭」模型写真

Q＆A
a3 大勢集まる場に出向き、食べ物で人を呼ぶ⇒P15

[平成13年度調査]

(特)波宜亭倶楽部
代表：野本文幸
活動開始・設立時期ー平成12年6月
メンバー数ー一般会員112人、賛助会員28人
事務局
〒371-0803 群馬県前橋市天川原町136-1
野本クリニック
TEL&FAX：027-223-6333

13　漂探古道（ひょうたんこどう）　和歌山県中辺路町

来訪者に接して、新しいまちの魅力を開発する

熊野古道・語り部

熊野古道語り部活動で地域を再認識

和歌山県内には京の都から熊野詣をするための古い道が残っている。中辺路町の名前である中辺路も、その代表的な街道のひとつ。昭和61年県では、この歴史的な地域の文化や自然を来訪者に正しく理解してもらうため、観光ガイド専門員制度をつくったのだ。このガイドは「紀州語り部」という名で各市町村に登録されていて、旅行者は観光協会などに申し込めば、地元の語り部を紹介してもらえる。

「漂探古道」は、この中辺路町の「紀州語り部」が中心メンバーとなっている。平成11年、多数の観光客が訪れた南紀熊野体験博の開催が、会発足の直接のきっかけとなった。多くの人と出会い、古道を歩いているうちにガイド自身も歴史の厚みや自然のすばらしさを再確認していった。その結果、プロの語り部を目指す勉強会として、古道を巡りながら歴史を探るという意味の「漂探古道」を立ち上げることとなった。

会拡大につながった学習会

第一に取り組んだのは、語り部養成セミナーである。ボランティアで活動した語り部が、地元の人に向けて、中辺路の歴史、自然、産業、暮らしをテーマに12回の講座を開いた。古道の基礎知識から、地域での暮らし方やふるさとのあり方などを話し合い、さらにガイドとしての話し方、台本のつくり方、実地研修などに及んだ。人口4000人弱の町で、セミナー参加者は延べ229人にのぼった。そして、このセミナーを契機に「漂探古道」の入会者も格段に増えた。

その他の活動は、会員の定例勉強会、定例現地研修を月1回開催。そして旅行者を対象に、ゆかりのある史跡や自然観察をする古道散策ツアーの案内を、年30～40回程度行っている。また、平成13年には古の行事だった「観月会」を企画。月を畑の神として豊饒を感謝する催しに加え、俳句の会や尺八演奏会なども行い、行事に彩りを添えた。会は、この地域づくり活動支援調査で活動資金を得たことにより、町内の認知度が大幅にアップし、行政や公的機関からの支援も受けやすくなったという。さらに、大学の研究フィールドとしても注目を浴びている（平成14年より関西の大学3校が参加）。

恵まれた環境を活かしたメニューづくり

今後は、熊野古道以外の魅力的な散策ルートを開発し、自然観察や山菜採取、健康ウォーキング、俳句ウォーキングなど、会員の趣味を活かしたメニューづくりにも取り組んでいる。町が他の地域の人からどう見られているか、語り部となることで、直接反応を聞くことができる。そんな体験が自分のまちを見直し、愛着をもつ足がかりになっている。

語り部養成セミナー

★たくさんの町の人を巻き込んだ語り部養成セミナー

会の仲間となる語り部を増やそうと始めたセミナーであるが、地域にある文化や自然の魅力を知ることができる講座は、語り部志望がそれほど強くない町民にも、関心をよんだようだ。　講座では古道散策を実際に行い、各自が自分のことばで地域の魅力を表現できるように指導。受講者は町への興味や愛着をさらに深めていった。

ガイドとして現地研修を行う

Q&A
a24 住民自らが地域の魅力を伝える「語り部」⇒P27

［平成13年度調査］

漂探古道
代表：木下幸文
活動開始・設立時期－平成12年1月
メンバー数－40人
事務局
〒646-1402　和歌山県西牟婁郡中辺路町大川　小松裕見子
TEL&FAX：0739-64-1870
E-mail：y-komatu@mb.aikis.or.jp

14　小田原やんべぇ倶楽部　　神奈川県小田原市

なりわい文化の魅力を現代によみがえらせる

地場産業・なりわい歳時記・交流

旧商家活用の公共施設を拠点に市民グループが発足

小田原宿の趣を残す商家の保存を求める市民の声に応えて、市が建物を買いとり、公民館とも観光案内所とも一味違う「小田原宿なりわい交流館」として平成13年9月にオープンさせた。市所有の施設でありながら、運営は、行政と地域住民で構成される運営委員会が担い、交流館を舞台に、市民によるまちづくりとしての「なりわい交流」が始動した。これを機に、「なりわい交流」を具体化していく集まり（＝ネットワーク）をつくってはと小田原政策総合研究所が提案し、当倶楽部が発足。メンバーは、小田原市政策総合研究所の研究員（有識者2名・市民4名）他、かねてから市民活動を実践していた人たちなど12名が参加した。

小田原のまちに新風を吹き込んだ「交流館」

交流を通して肩肘の張らないまちづくり

小田原の地で受け継がれてきた生業と小田原らしい生活のかたちをよみがえらせようと、昔から伝わる年中行事を現代風に再現している。そうしたさまざまな市民の交流が、歴史ある資産を核にしたまちづくりにつながっている。

◆なりわい歳時記

雑煮会、節分会、雛祭りなどの毎月の歳時記を、それらにまつわる食べ物や、しきたりと共に再現し、年齢、職業、男女、地域の壁を越えた交流を生み出している。

◆角吉応援団プロジェクト

市民の手で、かつての看板の復活や内装・裏庭の整備を進めようというプロジェクト。平成14年は、木のなりわいの一大拠点でもあった小田原で、木の文化の再興に努力している製材所や木彫作家など各方面の協力を得て、旧「角吉」時代にまちの象徴にもなっていたものに劣らない「なりわい交流館」の看板（クスノキ無垢板）を市民参加で手づくりした。

◆若者が考えるまち

小田原をフィールドとする院生・学生の研究活動をさまざまなかたちで支援するプロジェクト。平成14年度は東京大学工学部都市デザイン研究室の4年生の個人研究と早稲田大学理工学部の教授が担当する4年生の演習を支援した。

人とモノの輪を広げたい

支援終了後も引き続き、小田原流門松飾りプロジェクトや観光研究プロジェクト、千年蔵ブランド・プロジェクトといった街の活性化事業に取り組んでいる。交流館の運営委員会と協調しながら、市民によるまちづくりとしての「なりわい交流」を企画、立案、調整し、小田原らしいまちづくりを模索している。

★市民を巻き込むなら「まち歩き」

「なりわい歳時記」に、たくさんの人が気軽に参加できるように、「まち歩き」「遊びの要素」「生産者や工芸家との交流」などのアプローチを試みたところ、最も共感を得たのは「まち歩き」だった。

Q＆A
a6 地元自治体シンクタンクのネットワーク…⇒P16
a19 毎月の歳時記にあわせて参加型…⇒P25
a47 ライブな情報をホームページと…⇒P42

[平成14年度調査]

小田原やんべぇ倶楽部
代表：石塚義孝
活動開始・設立時期－平成14年4月
メンバー数－32人
事務局
〒250-0045　神奈川県小田原市城山2-27-12　ギャラリー＆カフェ空内
TEL&FAX：0465-32-0964
E-mail:cafe-ku@nifty.com
http:// homepage3.nifty.com/kadokichi-club/

15 「四国へんろ道文化」世界遺産化の会　愛媛県内〜四国

四国霊場八十八ヶ所から癒しの心を発信

へんろ道・交流

まちづくり活動の専門部会から誕生

地域の伝統、文化や歴史を見直し、「ローカルに生きる」ことの価値を再発見しようと、愛媛県内のまちづくり活動者のネットワークとして昭和62年に設立された「えひめ地域づくり研究会議」の中の専門委員会で、「四国へんろ道」の検証を始めたのが発端となる。「えひめ地域づくり研究会議」の事務局を務めた(財)えひめ地域政策研究センターと、「えひめ地域づくり研究会議」のメンバーの多くが参加していた「新しい風をおこす市民の会」という市民グループが交流を持ち始め、へんろ道を地域づくりに活かし、後世に伝えようと、平成12年9月、この会を設立した。会の名前の通り、四国へんろ道を世界遺産に登録することが目標。

まずは、へんろ道を知り、ＰＲすることから

支援期間中、研究者等を招いた学習会、地域の人と共に学習するフォーラム、世界遺産に値するかを検証するためのシンポジウムを開催した。また、活動を広くＰＲするために、会のホームページも開設した。
結成当初、活動資金の約８割を会員の会費で賄うことを想定していたが、実際に集まった金額が目標の半分にも達してなかったところに、この支援を得て、立ち上がり期の活動に大変役立った。

マスコミ報道を機に四国他県とも連携

「えひめ地域づくり研究会議」が主体となり、へんろ道文化の集会を繰り返しているうちに、各局のテレビで八十八ヶ所の紹介番組が放送されたり、新聞で報道されるなど、マスコミに何度か取り上げられた。これがきっかけとなり、まず、最初に反応してきた香川県の経済同友会と交流が始まり、やがて交流の輪は、四国四県経済同友会、四国霊場会を通して各霊場にも波及した。そして、これらの団体が連携して各県の知事に世界遺産の登録申請を提言するまでに至った。提言を受けた知事らは、四県による「四国遍路文化推進協議会」の設置を申し合わせ、行政も世界遺産への登録推進に乗り出した。

巡拝者が絶えることのないへんろ道

四国へんろ道とは…

僧・空海（弘法大師）が修行した八十八ヶ所の霊場を巡拝する道。全行程は1,450kmに及ぶ。空海が亡くなった後、高弟が大師の修行の地を巡ったのが起こりと伝えられている。以来約1200年にわたり、悩みや病気を抱えた人が、救われたい、お大師様に近づきたいと念じながらへんろ道を歩き、札所を巡る。四国霊場八十八ヶ所を巡る人のことを、親しみを込めて「おへんろさん」と呼ぶ習わしがある。

★四国四県が同じ目標に向かって

四国霊場八十八ヶ所という共通の財産を持ちながら、かつて四国四県の交流はあまりなかった。マスコミの報道などで、この会の活動が世間の注目を浴びたことをきっかけに、一丸となって世界遺産登録を目指そうと活動の輪が広がっていった。

Q&A
a44 慣れ親しんだ地域資源を再発掘⇒P40

［平成12年度調査］

「四国へんろ道文化」世界遺産化の会
代表：小山田憲正
活動開始・設立時期－平成12年
メンバー数－34人
事務局
〒790-0951 愛媛県松山市天山1-10-25 白石ビル星企画株式会社内
TEL：089-934-6088 FAX：089-921-1187
E-mail：office@88henro.com
http://www.88henro.com

16 にいがた寺町からの会　新潟県新潟市

まちなかの魅力をあかりで浮かび上げる

中心市街地・寺院・あかり

寺町の風景を活かし、まちの誇りを取り戻そう

古くから新潟市のまちなかとして賑わっていた古町周辺は、商店街としての活気がなくなり、まちなかとしての誇りや自信を失いつつあった。そのような状況の中、新潟のまちに愛着を抱き、まちの誇りを大切にしたいと願うメンバーが集まり、「にいがた寺町からの会」が設立された。きっかけは、メンバーのひとりが、新潟西堀沿いの寺院が連続した風景を発見し、「この風景を新潟のまちの財産として活かせないか」という想いを持ったこと。会の名称も“寺町”、そして寺町だけでなく、寺町から広げていこうという気持ちが“から”に込められている。活動は、①寺町から知る－寺町ガイド、②寺町から語る－寺町サロン、③寺町から楽しむ－寺町ムーブメント、の３つを基本に実施している。

まちの魅力を発見する連続企画「あかりむーぶめんと」

勉強会やトークライブを行う「寺町サロン」と、今のまちに活かしていく活動「寺町ムーブメント」を核に、平成14年度に展開したのが「あかりむーぶめんと」だ。まちの魅力を発見する継続的な手法として、夜の街の表情や、あかりで実験的に今の街並みを照らし、今の街並みに隠れている魅力などを浮かび上がらせる活動を、１年間にわたって行った。

◆あかりを学ぶ、新潟を学ぶ

専門家を講師として、寺町の夜景ウォッチングと照明セミナーを実施。また「にいがた寺町談義」として歴史を学ぶ連続講座を行った。

◆あかり、まちを楽しむ

寺町の各寺院の協力により、お寺のライトアップ実験や地元ＦＭ局とタイアップしたライブ、年越しの除夜の鐘などを楽しんだ。また、地元ホテルに「ニイガタ昭和浪漫」の企画を持ちかけ、復刻メニューをつくった。

◆まちの魅力を確認する

「あかりむーぶめんと」の総括として、企画や活動の成果を確認し、今後に結びつけるシンポジウムを開催した。

継続的な活動の中で新たなネットワークが誕生

まち歩きで発見した地域の資源や素材をどう紹介するか、という議論の中で活動を展開してきたが、今回、“あかり”という道具を活用した「あかりむーぶめんと」の継続的な活動を行うことによって、多様なネットワークづくりができた。照明の専門家「照明探偵団」や地元の歴史に詳しいキーパーソン、そして寺町の各寺院、地元企業との連携など、新たな協力関係ができ、今後の会の活動展開の可能性を広げることができた。

街並みを浮かび上がらせる“あかり”

★あかりで浮かび上がるにいがたの魅力

まちの魅力をどのように紹介するか。その手法のひとつとして取り上げたのが、“あかり”だ。シンポジウムでは、和紙や簾でつくった行灯200個を、参加者がまちの中に思い思いに置き、やわらかいあかりが港町の情緒を浮かび上がらせた。ライトアップで「美しい夜景」をつくるのではなく、美しいあかりの中で闇を演出し、そしてふだんは見慣れたまちに、いつもとは違う風景を発見することこそ大切だと考えている。

Q&A
a39地元企業にもメリットあるイベントを共催⇒P35

[平成14年度調査]

にいがた寺町からの会
代表：蒲原霊秀
活動開始・設立時期－平成13年
メンバー数－60人
事務局
〒950-1101　新潟市山田2307-272　新潟市観光情報館二階　（財）新潟観光コンベンション協会内　横山裕
TEL：025-265-8000 FAX：25-266-3357
E-mail：yutaka@n-teramachi.som
http://www.n-teramachi.com

■□地域資源の活用■地域文化の活用

17　まちづくりグループ「with AIBE」　三重県浜島町

漁業のまちらしさにこだわる若者のグループ

びん玉・若者のグループ・交流

若い世代が自主的に集まって会を設立

浜島は、漁業と観光を中心に発展してきた人口約6000人の町。昨今は、長引く構造不況などの影響で、さまざまな産業で低迷が続いている。「このままでは町が廃れてしまう」という危機感をもった若い世代が自主的に集まり、平成13年、まちづくりグループ「with AIBE」を設立。「あいべ」とは、浜島のことばで「歩け」という意味だ。メンバーは25名ほど。20～40代のさまざまな職種の人たちが集まっている。

海岸の特設ステージで手作りライブ

海に関わるテーマで活動を展開

◆びん玉ロードの整備

会を設立してすぐに取り組んだのが、びん玉オブジェの制作とびん玉ロードの整備。びん玉とは、以前漁業で使われていたガラス製の浮き玉のこと。現在はプラスティック製になっているが、昔ながらのガラス製のびん玉でオブジェをつくり、商店街に設置したり、海辺の道路に設置してびん玉ロードとして整備した。毎日夕方にはオブジェの中にろうそくを灯し、ロマンチックな雰囲気を演出する。

◆「渚のセッションライブ　ＩＮ　びん玉ロード」の開催

びん玉ロードから臨む海岸に特設ステージを設営して、手づくりのセッションライブを開催。平成14年度から引き続き実施している。

◆宮城県気仙沼市とのびん玉交流

東北の漁港気仙沼は、浜島と同じようにカツオ船の基地である。「with AIBE」の活動を知った気仙沼の人が知人に呼びかけびん玉を収集してくれた。このびん玉を受け取るために、往復2200kmの道のりをトラックで往復した。

◆あしあとつくり活動

浜島を訪れた観光客が、思い出になるようなオブジェを作成してそれを海岸沿いの道路に展示することで、浜島に愛着を持ち、何回も足を運んでもらおうという企画。オブジェは丸いプレートに自分の手形をつけ、名前を書くという簡単なものにして、誰でも気軽に参加できるようにした。

漁業の町らしい活動にこだわる元気なメンバー

メンバーは漁業のまちらしい活動にこだわっている。そして、とても元気だ。「“楽しいこと”“考えること”“評価されること”を考慮して活動の内容を考え、誰もが簡単に溶け込みやすい環境づくりも心掛けています」。こんなところに元気の秘密があるようだ。

また、イベント運営などではあえてマニュアルをつくらない。まちづくりにはそもそもマニュアルなどないと考え、自力で取り組んでいく意気込みを醸成する工夫も行っている。

★急がば回れ－地道な努力が大切

活動に対する住民からの評価も少しずつ定着してきている。「びん玉ロードそのものが“市民権”を得たと考えています。町の観光案内などでも観光スポットとして紹介されるようになったのは、毎日のろうそく点灯という地道な努力があったから。地元の人たちが声をかけてくださったり、掃除をしてくださったり…」。メンバーの言葉に実感がある。

Q&A
a12 マニュアルをつくらずにイベントを運営⇒P20
a43 住民にとって愛着のあるものを活用する⇒P39

［平成15年度調査］

まちづくりグループ「with AIBE」
代表：岩崎光宏
活動開始・設立時期－平成13年
メンバー数－25人
事務局
〒517-0404　三重県志摩郡浜島町浜島3321　井上雅平
TEL：090-1281-5180
E-mail:masahiro-i@town.hamajima.mie.jp
http://www.aibe.jp/

18　阿波農村舞台の会　　徳島県全域

地域に眠る「農村舞台」の復活

農村舞台・廃屋の復活・阿波人形浄瑠璃

外部の評価が高まって発足

徳島県はかつて、集落ごとに農村舞台を持ち、人形浄瑠璃などを楽しんだ劇場王国だった。東京芸術大学や東京理科大学、俳優の高津住男氏など県外から徳島の農村舞台の調査に来たことをきっかけに、徳島の貴重な文化について再認識する機運が高まり、会の発足へと急展開した。平成15年5月、農村舞台という阿波の文化的伝統を地域財産として再生すると共に、都市部と農村の交流を促進し、活力に満ちた地域社会を実現することを目的に活動している。

農村舞台復活公演で活動を展開

平成15年度に行った主な活動は、農村舞台現状調査、農村舞台復活公演、機関紙発行による普及活動だ。

農村舞台現状調査では、「舞台背景に用いられたふすま絵のカラクリ研修」や「各地の農村舞台の見学会」を行い、農村舞台について会員の理解を深めた。農村舞台復活公演では、三好町法市の船渡神社境内の農村舞台を会場に、約80年ぶりの復活公演を実施した。

過疎・高齢化の進んだ集落での活動

世帯数17軒、高齢化の進んだ法市集落では、農村舞台の維持が困難な状況にあった。しかし、この舞台をなんとしても甦らせたいと考えたメンバーは、法市の舞台のすばらしさを住民に語り、復活公演を持ちかけた。「古い建物よりも病院がほしい」という現実的な住民の声も聞かれたが、あきらめずに足を運んだ。ある時、人形座のメンバーと共に訪問して人形劇を住民に披露したことが転機となり、復活公演につながった。

地域住民による保存会の立ち上げ

「阿波農村舞台の会」では、公演プログラムの作成や人形座の手配、パンフレットの作成など、住民の活動を支援する立場に徹することとし、住民主体の保存会を立ち上げた。第1回目の復活公演では、都市部の人に広くＰＲすることにしたが、主役の住民が訪問客をもてなすことで疲れてしまっては、一過性のイベントとなりかねない。村の人も楽しめる公演とすることとし、まずは地域に縁のある親戚などを対象に公演を続けていく。

調査によって、115棟の農村舞台が把握され図面として記録されている。これからその115棟の中からひとつずつ活用の方策を探っていく予定だ。

復活公演当日の一幕

農村舞台とは…

庶民の娯楽として人形浄瑠璃などを上演していた舞台。かつては、村人が力を合わせてつくりあげ、地域の集会所などの役割を果たしていたが、現在では倉庫代わりなったり、解体され消えようとしている。

建物は、集落の共有財産として所有され、管理は神社の総代によって行われている。老朽化した建物を保存するために、町の補助金など公的な支援が必要。

★地域住民のやる気を起こす

小さな集落に地域づくりを持ちかける場合に、「地域づくりをしましょう」と訴えても受け止めてもらえない。まずは「お祭りをしませんか？」など、気軽に声をかけていくのがポイントである。

Q＆A
a49 各地にアンテナを広げて情報収集⇒P43

［平成15年度調査］

阿波農村舞台の会
代表：大和武生
活動開始・設立時期－平成15年5月
メンバー数－55人
事務局
〒770-0803　徳島県徳島市上吉野町3-22-2　佐藤憲治
TEL&FAX：088-655-6547（佐藤方）

19　ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村　鹿児島県熊毛郡南種子町茎永地区

古代米を守り伝えながら同じ源郷の地域と交流

赤米・独立村

合言葉は“人づくり・モノづくり・環境づくり”

南種子町は、鉄砲伝来の地、宇宙センターのある町として知られる種子島の南端に位置する人口約7400人の町。温暖な気候に恵まれ、昔から農業が盛んだったが、平成６年度から村づくり重点地区の指定を受けた茎永地区は、集落農場普及推進事業を導入して日本一早い・美味しいコシヒカリの超早場自主流通米の産地を確立した。さらに、早期水稲の裏作を利用したソラマメ・カボチャの栽培面積を拡大し、所得倍増や地域の活性化に取り組んでいた。

そんな中、地域おこしを進めるために地区公民館との連携を密にした組織をつくろうと、元教員、役場出身者、議員らが立ち上がり、平成11年11月、「ミニ独立村（仮称）千石村を創る会」を発足させ、翌月「千石村」を設立した。名前の由来は、江戸時代に茎永地区の米の収穫量がおよそ1100石だったこと。平成10年10月にオープンした展示施設「赤米館」を拠点に、知恵と経験を出し合い独創的な村づくりに挑戦している。

日本に３ヶ所しかない赤米の産地の人々が離島に集結

離島ということもあって、日頃は島の外の人との交流がなかなか難しいが、財団の支援期間中に開催したイベント当日は、ふだん静かな島がにぎわった。

◆『ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村』結成

第１回千石村会議を開いて、規約・行事計画・予算などを決定し、宝満神社参道のバリアフリー化、千石村の看板・案内図の設置、写真展・特産品郷土料理講習会の開催、赤米の栽培に取り組んだ。この年の赤米は豊作だった。

◆「赤米サミット2000　in　千石村」開催

全国に３ヶ所しかない「赤米の源郷」（南種子町茎永、対馬の厳原町、岡山県総社市）の関係者が茎永地区で一堂に会し、赤米を中心に地域振興に取り組んでいる状況や、今後の活動について情報交換し、交流を深めた。それまで、総社市とは交流があったが、厳原町とは、イベント開催を機に町の企画課を通して連絡をとって交流が始まった。サミットの時に神楽を奉納するために、3市町が協力して神楽を復活させた。

「赤米サミット2000　in　千石村」の会場

赤米とは…

縄文中期から後期につくられていたイネの原種。現在も慶事などに使われるが、古くは、神様が宿る米として大切に扱われた。神社の信仰とともに伝承されてきた赤米は、種子島、長崎、岡山の３ヶ所の神社に由来するものに限られ、３地区とも、種を門外不出として守り継いでいる。

Q&A
a45「赤米」のキーワードで他地域と交流⇒P41

［平成12年度調査］

ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村
代表：羽生源志
活動開始・設立時期－平成11年
メンバー数－41人
事務局
〒891-3763　鹿児島県熊毛郡南種子町茎永5662
TEL&FAX：09972-6-7205

20　特定非営利活動法人　さっぽろ村コミュニティ工房　北海道札幌市

たまねぎ倉庫を拠点として地域情報発信

コミュニティ放送・石造りたまねぎ倉庫

地域内情報交流としてコミュニティ放送局に着目

札幌市東区は、「さっぽろ」という名前の発祥の地。かつてたまねぎ畑が広がっていたこの地域、今はマンションが建ち並び、旧住民が高齢化する中、新旧住民の交流が進まないなどの問題を抱えている。そこで、まちづくりに関わる有志が「東区情報まちづくりプロジェクト」を結成したのが平成13年5月のこと。「活発な地域内の情報交流が、まちの活性化につながる」ことと、「コミュニティ放送局」に着目し、フォーラムやセミナーを開催した。そして地域に残る「石造りたまねぎ倉庫」を拠点としたコミュニティ放送局を活用してまちづくりを進めようと、平成14年1月にＮＰＯを設立した。

たまねぎ倉庫で行った「街しるべ勉強会」

地域の歴史的資源を発掘し、ラジオ番組を制作

コミュニティ放送を活用した情報交流やネットワークづくりを行うため、ラジオ番組制作セミナーやまちづくりフォーラムを実施した。また、歴史的に由緒ある「ななめ通り」についての勉強会や街歩きを実施して、地域の歴史に着目したネットワークづくりを図った。

◆フリーマーケット、さっぽろ村サロンの開催

フリーマーケットや「さっぽろ村サロン」（トークとミニコンサート）を毎月定期的に開催。倉庫に気軽に来てもらうきっかけづくりを行った。

◆ラジオ番組「東区今昔物語」の制作

ラジオ番組制作セミナーを開講し、研修を行うと共に、開局に先立って「東区今昔物語」などの番組制作を行った。

◆街しるべ勉強会、ミニフォーラム

「ななめ通り」の勉強会や街歩きを行い、「ななめ通り むかし・いま・これから」と題したミニフォーラムを開催。

◆まちづくりフォーラム

「コミュニティ放送局とまちづくり」をテーマにフォーラムを開催。コミュニティ放送を活用した地域住民自身による情報発信について考えた。

たまねぎ倉庫がコミュニティサロンの役割を担って

ラジオ番組制作や街歩き・勉強会等を通じて、地域の歴史的資源やまちの魅力に対する認識が、少しずつ広がっている。今後、ラジオ局の発足や交流活動を通じて、「石造りたまねぎ倉庫」が、地域の情報交流拠点「コミュニティサロン」としての役目を果たすようにしたいと考えている。なお、このコミュニティ放送局は、さっぽろ村コミュニティ工房が地域の企業や個人に出資を呼びかけて設立された「（株）さっぽろ村ラジオ」の事業とし、平成15年4月に開局した。

★シニア層をはじめとする人材に出会った

コミュニティ放送を切り口に、地域の歴史的資源を発掘したり、地域の人材との出会いが生まれた。ラジオ番組「東区今昔物語」を中心となって企画した60代男性や、「ななめ通り」の勉強会に参加し独自に冊子までつくってしまった80代男性など、シニア層の活躍も目立った。いろいろな人が、得意な分野でまちづくりに関わる場を提供することは重要だ。

Q&A
a11 セミナーを開いて人材育成⇒P19
a13 歴史的な建物を拠点にする⇒P22

［平成14年度調査］

(特)さっぽろ村コミュニティ工房
代表：小倉英俊
活動開始・設立時期－平成14年1月
メンバー数－200人
事務局
〒065-0012　北海道札幌市東区北12条東13丁目2-28
TEL：011-748-7577　FAX：011-748-7770
E-mail：npo@sapporomura.com
http://www.sapporomura.com/

■□地域資源の活用■地域史等の資源の活用

21　特定非営利活動法人　二十一世紀まちづくりの会　　埼玉県鳩山町

写真展開催による交流活動

写真展・ニュータウン・里山

まちおこしのためのボランティア活動からＮＰＯ法人化へ

平成11年4月より、まちおこしを目標に活動してきたボランティア「鳩山ベンチャーセンター」が中心となって、同年11月に設立した団体。会員がそれぞれの得意技を活かして、竹を利用して竹炭をつくり河川浄化に利用する環境保全活動、デジタル映像制作の技術を活かして、伝統行事の撮影など行う文化・教育活動、送迎や家事援助・犬の散歩など「助けあいの会」による福祉活動、地域おこし活動などを行っている。

写真展「鳩山・心の風景～里山の今昔」の開催

平成15年度は、日本の高度成長期以前に見られた地域社会の人々のつながり方を探り出すことを目指して、昔の鳩山町の写真を町内から集めて展示活動を実施した。

◆写真展・フォーラムの開催と巡回活動

昭和という大転換期を生き抜いてきた住民の暮らしぶりや苦難を物語る写真を展示し、次代の子どもたちに語り伝えるプロジェクト。展示期間中にミニフォーラム「昭和の鳩山に生きて」を開催し、他市町村でも巡回展示を行った。

◆素材（昔の写真）の収集

写真展開催にあたり、町や自治会の広報誌を借りて昔の鳩山町の写真提供を呼びかけ、300点以上の写真を集めた。

◆資料のデータベース化

終了後は、写真をデータ化して小中学校や図書館に寄贈。

里山農村地域とニュータウン地域を結ぶ

鳩山町は鳩山ニュータウンが開発されて30年以上が経過した今もなお、里山農村地域とニュータウン地域に二分されており、二地域間の交流はほとんどない。鳩山ニュータウンでは、居住者の高齢化や空き家の増加、商店街の衰退とニュータウンならではの問題が顕在化し、早急な対応が望まれている。鳩山町の昔と今を“写真”で切り取り多くの人に公開することで、地域への関心を呼び起こし、その写真を集める過程を通じて二地域の交流のきっかけづくりを図った。

ＮＰＯという中立的な立場で地域づくりの素地を整える

活動の第一段階は、伝統行事の記録撮影を続けて地域住民との接点をつくった。今回の活動は第二段階にあたり、接点を面に拡大することを試みた。写真の提供を呼びかけてそこから思わぬ人脈が開けるなど、全町と協働体制を整えることができた。その成果のひとつとして、遊休農地を利用したログハウスタイプの分譲宅地開発で里山を守る試みも始まっている。今後は第三段階として、地域全体のネットワーク化を目指し、町内のすべての資源をマップ化して活用していく。

鳩山町の里山風景

★実績をつくり示す

依頼された事業が資金不足だった時は、文句を言うより実績を示すことで「なにかする時にはお金が必要」ということを伝えることができる。実績を積み重ねて、あの団体に任せれば安心という信頼を得ていくことを大事にしている。

［平成15年度調査］

(特)二十一世紀まちづくりの会
代表：長橋善郎
活動開始・設立時期－平成11年
メンバー数－会員58人
事務局
〒350-0321　埼玉県比企郡鳩山町大字赤沼1902
TEL：049-298-2061 FAX：049-298-2062
http://www.hatoyama.info/

■□地域資源の活用■地域史等の資源の活用

22　特定非営利活動法人　葉山まちづくり協会　　神奈川県葉山町

行政と協働で地域の「まちづくり資源」を発掘

行政との連携・生活文化資源・まちの未来遺産

行政と協働のまちづくりを実施するために設立された団体

葉山の生活文化を継承し創造することを目的として、町民によるまちづくりの拠点「葉山まちづくり館」（葉山町立図書館２階に開設）の運営やまちづくりに関わる各種の支援・啓蒙活動を展開している団体。

平成11年に葉山町が開始した行政と町民の協働による事業促進の施策を背景に、平成12年度、13年度には住民参加型の組織が形成され、平成14年葉山まちづくり支援協会設立、平成16年２月法人格を取得した。

まちづくり資源をマッピング

まちづくり資源の収集・整理・公開

葉山町には、海や里山などの自然環境、近世・近代に建てられ育まれた別荘建築や四季折々の諸行事など、多様な生活文化資源が存在している。これらを「まちづくり資源」として活用するために、住民へのアンケートやワークショップを実施しながら、「まちづくり資源」を収集・整理すると共に、「葉山未来遺産」の候補リストを作成・公開した。

◆**「葉山大好きデータ2000/2001」の整理・分類**

平成12年と13年に収集した約700件の既存データを元に、画像データを加え、地図にプロットした。

◆**「まちづくり資源」再発掘**

町内会ネットワークを通じて、アンケートやヒアリングを実施し、新たなデータを収集した。

◆**イベント・カレンダーの作成**

地域行事の取材調査と記録づくりを行い、協会のホームページで公開した。

◆**「葉山未来遺産」の定義・分類や登録制度などの検討**

ワークショップなどを通して実施。未来遺産登録の候補となる120枚のシートを作成した。

ＮＰＯのあり方のひとつのモデル

町内のまちづくり団体の核となり、ネットワークづくりや他団体のサポートの役割を担うことを目指して、行政の呼びかけにより立ち上がった団体。

町の助成事業の事務局を担当するなど、町と密接な関係を持ちながら活動を展開しており、町からの委託費も活動資金のうち大きな割合を占めている。いわば行政主導のＮＰＯであるが、同時に自主事業も積極的に展開し自立的な運営を模索しており、ＮＰＯのあり方のひとつのモデルでもある。

★地域のネットワークを活用

この会には団体会員の制度があり、町内のＮＰＯや事業者、町内会連合会などが会員となっている。会員となった各団体は、互いにノウハウや人脈を活かしあって、パートナーとして、また活動を応援したりされたりといった自由なネットワークをつくっている。会では、こうした会員のネットワークづくりを手伝うと共に、ネットワークを活用して活動を展開している。

[平成15年度調査]

(特)葉山まちづくり協会
代表：森田昌明
活動開始・設立時期－平成14年・16年2月（法人格取得）
メンバー数－309人
事務局
〒240-0112　神奈川県三浦郡葉山町堀内1874　葉山町立図書館２階
TEL&FAX：046-876-0421
http://www.hayama-kuretake.net/

空き施設の活用における「保有主体と活用主体の分離」の重要性

山岡義典（日本ＮＰＯセンター　常務理事／法政大学　教授）

地域づくりやまちづくりと言えば何かを作ることという考えは過去の話である。これからはますます多くの地域やまちで人口が減り、さまざまな空き施設が生まれてくる。それをいかに活用するかが、地域づくり・まちづくりの大きな鍵になる。4年にわたって実施された地域づくり活動支援調査の対象プロジェクトにも、このようなテーマが多数含まれる。

それらの例からも分かることは、空き施設の活用における「保有主体と活用主体の分離」の重要性だ。施設の保有主体がそのまま活用主体になろうとすると、どうしてもこれまでの使用にとらわれて思い切った新しい発想は生まれにくい。また活用主体が必要な施設を新たに保有しようとすると、膨大な固定費の確保に無駄なエネルギーを消耗しかねない。保有する者は保有の論理で慎重に行動し、活用する者は活用の論理で身軽に行動する。ここから新しい動きが始まるのだ。

ここで「主体」といっているものには、政府や自治体などの公共団体、企業などの営利組織、公益法人やＮＰＯ法人などの非営利組織、それに個人が考えられる。公共団体の施設を営利組織が活用する、非営利組織が活用する、個人が活用する、その可能性を保障し促進することが必要だ。同じく営利組織のもつ施設を公共団体が活用し、非営利組織が活用し、個人も活用する。非営利組織が施設をもつ例は少ないかもしれないが、それを公共団体が、営利組織が、個人が活用してもいい。個人の施設は相続が発生するという点で他とは異なる難しさをもつが、暫定的なら公共団体が活用してもよいし、営利組織が活用してもよい。もちろん、非営利組織や別の個人がつかってもよい。このような多様な組み合わせが多様な可能性を生むが、その実現のために大事なことは何か。

それぞれの組み合わせにはそれぞれの特徴があるが、同時に制度的な制約もある。この制約を解決することがまず大事だ。例えば、旧文部省の補助金で作られた学校を高齢者のデイケアセンターに使用することは、かつては難しかったが今は可能になった。私立幼稚園の施設を営利組織が使用すれば固定資産税はどうなるのか、といった税の問題もあろう。このような課題を一つ一つ個別に解決していくことも重要であるが、体系的に調べて制度改革につなげることも必要であろう。

次に大事なことは、公的機関であれ民間組織であれ、信頼性のある仲介の仕組みをつくることだ。施設の保有者がなかなかそれを貸そうとしないのは、一旦貸すと権利が発生し、それが固定するのを恐れるからである。信頼できる人や組織に権利調整を任すことができれば、安心して貸すこともできる。そしてそのような仕組みができれば、そこには空き施設の情報とそれを活用したい者の情報が集まり、おのずとマッチングの機会も増える。空いた施設があればその利用の可能性を提示して使用したい者を募集したり、場所を探している者がいれば貸せる施設に呼びかけて交渉したりすることもできる。不動産屋さんの仕事のようでもあるが、もともと儲かる仕事ではないし、しかも地域づくりやまちづくりの視点からの構想力も期待される。民間でやるなら非営利組織の仕事にふさわしい。

もうひとつ大事なことは、使用にあたっての資金的なサポートだ。行政による補助金であってもよいし、商店組合や商工会議所などの助成でもよい。ちょっとした改装の初期投資と何がしかの家賃補助が加われば、活用したい人はぐっと増えるかもしれない。

そして何より大事なことは、主体が代わってもその施設の意味は継承するということである。どんな施設にも長い歴史の中で築かれた意味がある。意味は価値である。それを無視した活用は地域から愛されない。それはまた、これまで使用してきた保有主体に敬意をはらうことでもあるのだ。